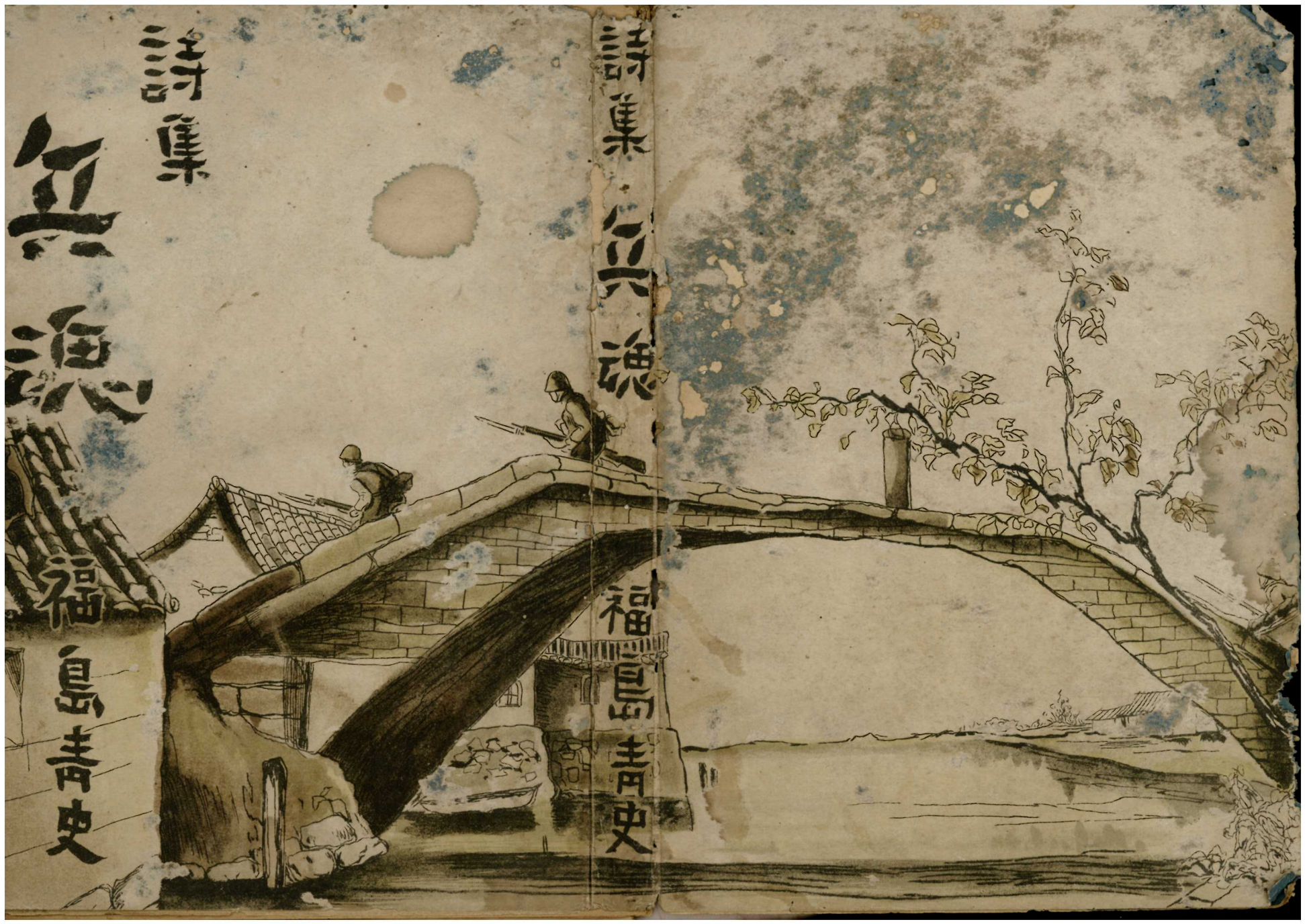
詩集

兵隊

福島青史

詩集 兵隊 福島青史



福島青史著

兵魂

東京 軍事界社 版

序文

大木惇夫君からの紹介狀を持つて、福島靑史氏が來訪された。

作品を拜見すると、いかにもその手紙にあるやうに、戰場の實感に搏たれるものがあり、また作者の誠實な精神のにじみ出てゐるものがあるやうに思はれた。

その上に、この作者はもう一つ相當に豊かな言葉といふか、語彙といふか――それを、きはめて自然に身につけてゐる人のやうに思へる。さういふことのすべてが、私たちのやうな內地での朝夕を送つてゐるものには及びがたいものばかりである。

かういふ作品を讀んでゐると、旦暮はるかに戰場を想望するのみで、焦思の念に驅られて書く私自身の作品などまことに恥しく、かういふ序文を

書くことさへ、何か烏滸の沙汰のかぎりであるやうな氣さへして來る。

傷痍軍人福島青史君の再起奉公の詩精神への私の敬禮だけを、この短い文章から汲みとつていたゞきたい。

昭和十八年八月

百田宗治

目次

序文……百田宗治

戰場日月篇

戰場日月……三

蹈海……六

時計臺……九

小休止……一三

前線追急……一五

古兵の言……一八

墓標……二一

捕虜の眼……二五
月下の盃……二八
はだかの兵隊……三〇
片影一葉……三三
難民區……三六
春風駘蕩……三九
機甲前進……四二
國境前線の歌
(1)分屯隊……四四
(2)日記……四七
日本列島篇
神います國……一三

特殊潛航艇……一六
コタバルの火……五九
舟艇移乘……六二
海……六四
肉彈……六六
幕舍……七三
訣別……七六
星章……七八
南の海圖……八一
戰友愛……八四
ソロモンに戰ふ……八六
空征かば……八八

花……九〇
日本列島の秋……九二
血闘……九五
社頭……九八
戰友星……一〇〇
コトバ……一〇三
ふたたび十二月八日を……一〇五
軍事郵便……一〇八
白衣兵……一一〇
社頭祈願……一一三
ジャカルタ放送……一一四
南をおもふ……一一七

馬來の音信……一二〇
下駄……一二二
草枕……一二四
草に哭く……一二六
認識票……一二八
悲願……一三〇
北門鎮護……一三二
戰友よ……一三四
神去りぬ……一三八
アッツに死す……一四二
軍旗の下に……一四四
旗……一四六

神々の翼……一四八
決戰の空へ……一五〇

草莽篇

草莽……一五五
鄕土……一五八
阿蘇の風貌
(1)一月七日の阿蘇……一六〇
(2)一月十一日の阿蘇……一六二
(3)一月十八日の阿蘇……一六五
(4)二月七日の阿蘇……一六八
青年……一七一
壯年……一七四

拓士……一七七
氣球……一八〇
工場地帶……一八二
職域……一八六
賣らずの辯……一八九
鐘音……一九二
空戰……一九五
空の防人……一九八
日本刀……二〇一
別盃……二〇四
日本魂……二〇七
春宵征途に賦す……二一〇

草莽孤心……二二三
歴史……二二六
願望……二二八
跋文……石原純
後記……著者

戰場日月

戰場日月

民四億、興亡の歴史に飢餓し
悠遠の長江に渇ゑては
日夜、求道に迷ふ

戎衣、汗に脂を厚うしては
踏む歴程の幾百里
戰場の典雅あらはに
物の象(かたち)みな茫漠と絶え果て
巡り來る　幾春秋

雲境の歳月なれば
來し方の地は古く、山は深く
院子(いんづ)の花に情を寄せては
畫廊にうたかたの夢をむすび
朝(あした)來れば動哨となりて
新しき兵を迎へ
夕去れば壕を守りて
古き兵を送りたり

ああ白き風塵の中に
霖雨しとど軍鼓を叩き
生死(しやうし)なければかくも黄泥を啜り
防人　我の

醜の御盾　我の
太き肩に骨箱犇と撫しつつ
今宵、前線へ進擊す

蹈海

波が鳴つてゐる
支那海の暗いうねりの音だ
遮蔽された五燭の燈が
時々、風に搖れては點滅する
起きてゐるのは私ひとりだ
私たちは　この支那海をわたり
大陸の新戰場へゆくのだ
埠頭の眞日に旗をふつてゐた人波が
ゆめのやうに想ひだされる
眼をつむれば

父のこと
母のこと
きやうだいのこと
そして
その日への激しかつた演錬のこと
惻々として胸に去來する
戰友たちはぐつすり眠つてゐるらしい
歩哨の靴音が
頭上をめぐつてはまた遠くなる
生も死も考へず
往昔はぼうとしてただなつかしい
いのちささげて
いまは支那海をわたり

大陸の新戰場へいつて戰ふのだ
馬糧のにほひ
汗のにほひ
舟底にあがく蹄の音
機關のひびき
五燭の燈がゆれ
あたりは深い闇につつまれる
起きてゐるのは私だけらしい
いま、支那海をわたつてゐるのだ

時計臺

迷路に野犬がゐて
空洞のやうな街——
遺棄された銃包と敵屍と
虎列刺の街——
時計臺だけが
目貫き大路のまん中に
冷酷さかぎりなく
ぬつと立つてゐる
長針は　九時を指して止り
この街の死に絶えた時間を示す

又銃の列が
家並のかげに續き
兵ら屯してはゐるが
なんといふさみしさ
纏足の老婆ひとり
蹌踉としてあらはれ
聲ひとつしない街を
無表情に
歩み、去る
新生活運動のポスターも
地に墮ち　風にまひ
疾走するトラックは
捕虜を乘せ

家々の甍をおとす
ああ　九江(きゅうこう)の街
廢墟の秋は
時計臺に
しんかんと日が照るばかり

小休止

棉畑に
どしんとひつくり返へり
仰向いてふうつと呼吸をつくと
まつ青な空から
ぢいんと降つてくるものがある
腰の水筒をさぐつて
湯のやうな水を呑む
一滴もこぼしてはならない
生命の水である
棉の花はほけほけと白く

その白さのなかにかくれて
大陸の土のほてりを感じながら
ぼかんと無心になつてゐる
物をいふことさへ臆劫なのだ
歩いて　歩いて　歩いて
人間の智慧の及ばない
高い貴いものを凝視めながら
黄土の道を追ふてゆく
「おおい、前進だ」
棉畑のあちこちから
むつくり起き上つた兵隊が
一つの方向へ
たくましい歩調で流れはじめる

ああ　撃たねばならぬものをもとめて
武山攻撃の日は近い

前線追急

寒月の青い光が額にひびく
軍用トラックのえんえんたる段列が
午前四時の軍道を
前線へ急ぐ
仄かな白明のなか

點滅する前部燈の焦點を
噎せるやうに黄塵があらふ
段丘には
堀りかへされた塹壕が

傷痕のやうに續き
砲聲が、とほく白明の空を裂く

トラックを下りれば
一隊の兵が手をふつて迎へる
ああ彈帶のやうだ、と
夜明けの視野にみる壕を指さす

丘のてつぺんには
深いみどりの松の木が一ぽん
そこからは敵の第一線がよく見える、と
古參兵は滿足そうに說明する

しづかに夜が明ける
軍靴にふみつけた雜草の下では
ふるさとの蟲が啼いてゐて
戰場はだんだん騷がしくなる
おお生きてゐたのか、と言つたまま
先發した同年兵の掌を握つて
何も言へない

捕虜がゐる
イエローバットを一本やると
「謝々、先生」と、不憫な眸つきをする
朝の太陽が
前線の風景をあかるく照らしはじめた

古兵の言

ぷんぷん臭いのは何でありますか
あれは、それ、あの非業の死を遂げた
憐れなものの末路のにほひだ
見ろ、あの醜い姿を
指さす古兵殿の
軍服は、泥にまみれ　汗に汚れ
雨に滲み　血にぬれ
しかも綽然としてゐる頼もしさ
段丘の草叢に
畦道のほとりに、

定規でもあてらて
丹念に削られたやうな壕のなかに
うづくまるやうにうつ俯した
便衣の彈痕はあざやかだ
暑熱にむうと噎せて
新參の兵は
背の鐵兜をゆすり上げる
お前たちも
このにほひを嗅いで飯をくひ
眠り、歩き、戰ひ、一人前になるのだ
これくらゐに顔をしかめるやうでは
日本の兵隊とは言はれない
修業が肝心だ

よいか、判つたか
古兵殿は、天へ向つてからからと笑つた

墓標

細かな雨が降つてゐた
兵隊の貌をぬらし
それは、縮緬のやうに
やはらかく衣袴に滲みた
どの兵隊も齒を喰ひしばり
長い行軍に耐えてゐた
風が吹くと
雨は、霧のやうにくだけた
この大陸特有の粘い赭土は
兵隊の軍靴を次第に重くしていつた

名も知らぬ部落をぬけ
道がだんだん狹くなり
やがて、谿間へ下つてゆく
先發隊が
數倍の敵に包圍され
二日二夜の激戰をつづけたといふ
このあたり一面にも雨はけむり
裝具は
兵隊の蹄音と共に鳴つた
草はぼうぼうと深く
白木の墓標が
その草のなかに一ぽん立つてゐた
兵隊たちは

ああ、と驚きの聲をあげ
そのまへに煙草を供へたり
あたりの花をさしたり
わづかの小休止に
俱にこの大陸で戰ふたものの
せつないいのちのつながりから
父母(ちちはは)の國とほく
邊陲の草にうもれて
ふたたびは訪ふひともないであらう
墓標をかなしみ撫で
雄々しかつたであらう
この兵隊の死を語りながら
明日を生きぬ身の

いくたびも、ふりかへりふりかへり
雨にうたれて
前線へ、赭い泥濘を踏んでいつた

捕虜の眼

少年兵の聲が
ぴんぴん霧のなかをつき拔けてくる
冷めたい土語だ
訊問してゐるのだ

どの面貌も不氣味に歪んでゐる
殺伐な敵意の眼を
火のやうに感じながら
捕虜たちに話かける
やがて、この戰場にも平和がくるのだ

督戰の日々を戰ひつづけた老兵の
空しいまでの焦慮の眼のいろ
日本と中國との戰ひは
きつと、あの旗を擊つときに判るのだ

方木香(ふあんむうしやん)は、きれいな眼をもつてゐた
アメリカの大學を出て
ソ聯へも留學したと、
得意そうに英語を喋るこの共產黨員も
東洋の女ぢやないか、と言ふと
沈默つてしまふ
霧が、だんだん霽れてくる

裏街を曲つてゆく捕虜の列——
良民たちが物を賣りにくる
戰友に抱かれた少孩(しやうがい)が
東洋平和のためならば、と歌つてゐるではないか

月下の盃

月をながめて、今宵はふたり
何を語らう、戰友よ
日本の美しい傳說か
それとも、中國の
とほい歷史の花々か
召されて、いのち知らぬ身が
この邊境のつれづれを
せめて、しづかに酒をくみ
月をうかべて、何を語らう
殘匪を討つたあの夜の

へんにかなしい夢の話か
お國言葉の手紙を抱いて
戰ひ死んだあいつのことか
それとも、腰の日本刀に
月のあはれなひかりを映し
この中國の悲詩をうたつて
一さし花のやうに舞はうか
山は高く、谿は深く
流れは白く
ああ　中國の月の宴(うたげ)に
何を語らう、戰友よ

はだかの兵隊

はだかの兵隊が
地雷を堀り出してゐる
炎天の道は
敵の第一線へうねうねとつづき
草をわたる風の熱い

灼けた圓匙に
ぢりぢりま上から直射がくる
泥柳のかげでは
とほい砲聲をききながら

假眠する兵隊もゐる

むかうの稜線から
ぐいぐい高度を下げて
連絡の飛行機が通信筒をおとす
よいしよ、と無雜作に圓匙を投げだして
はだかの兵隊が
そこへ飛んでゆく

むくむくと
大きな入道雲がのぼる
十三時——
戰場は、しばらく閑散である

片影一葉

まひる、しづかに蟲が鳴いてゐる
なんといふ蟲であらうか
砲彈にうちぬかれた屋根のしたの
がらんとした靜謐に
しきりに、蟲が鳴きつづけてゐるのだ

屋根の彈痕からは
ふかい青さの空がみえ
ほのかな白光が
土間をわづかに照らしてゐる

誰れもゐないのだ
散亂した器具や
崩れ落ちた壁土や甃に
しつとりとしめつた硝煙の匂ひがする

足許から
私は、一枚の寫眞を拾ひあげる
それは正規軍の軍服をつけた
精悍な兵士の寫眞だ
父もゐたらう、母もゐたらう
きやうだいもゐたであらう
無益な抗戰の日を
いま、敗殘の身に生きてゐるのか

それとも、日本軍の
潮のやうな進擊のまへに
戰ひ死んでゐるのであらうか

土間に堀られた
待避壕の暗いふかさ
焦げた欄間に貼られた春聯が
ひえびえとした風にゆれる
屋根の彈痕から洩れる
ほのかなひかりのなかで
この大陸の土の歷史を
私は、しみじみとした感慨で想ひつづけ
うすく砂埃に汚れた一枚の

寫眞を手にして立つてゐる
しきりに、蟲が鳴いてゐるのだ

難民區

疱瘡の子を抱いて
流氓の母親よ
赤い練瓦の彈痕からのぞいて
日本兵を拜む老婆よ
物を賣りにきては、父がないといふ
はだしの少孩たちよ
長江の流れは悠久ではあるが
興亡の戰火のなかからは
もう、青い草の芽が萠えてゐる

望樓に、對空監視の兵の眼鏡がひかる
美しい雲の流態をみながら
ぢりぢり灼ける黄土をふんで
宣撫班の施米がはじまる
中國の風懷をたのしみながら
戰ひのあとの靜閑に
四ツ手網で魚を採る老爺もゐる

江岸に、
いまは忘られたトウチカがある
銃眼からのぞけば
暗いしめつた風が顏を洗ふ
砲彈に削られ

風化した白い側壁を撫でながら
神のやうな日本兵の喊聲が
この銃眼に炸裂した日をかなしむ

日の丸の機翼あざやかに
ゆつたり傾いて爆音がきこえ
巡察の兵の一隊が
汚れた胡同へ靴音をたてて曲る
その胡同の石疊のうへで
銅幣を投げて
新しい中國の土に育つ少孩たちよ
軍裝の兵を戴せた船隊が
前線へ、しづかに遡航してゆく

春風駘蕩

片言と手眞似の取引である
鷄卵と軍票と
交換交換はなかなかむつかしい
兵隊たちは
新鮮な野菜に飢えてゐるので
よく韮を採りにゆく
それをゆでると
ふるさとの草の匂ひがするのだ
そして、附近の村民たちと
顏馴染になる

少孩たちは
兵隊にすぐなついて
日本の歌をおしへてくれとせがむ
しかし、こんな少孩たちも
なかなか商賣が上手だ
掛け引きにたけてゐる
汚れた笊に
いかがわしい天ぷらを持參したり
醉ひ醒めの惡い支那酒を持つてきたり
兵隊もときどき啞然とすることがある
やはり、この國の住民は
揚子江のやうに悠暢ではあるが
黄土のやうに辛抱强く

それでゐてふてぶてしいと感心する
「錢少々プシン」
「這個、高價でなあ」
髭の兵隊と老爺と
春の日は永く
廬山はとほく
片言と手眞似の取引は
漫々的でまだ成立しそうにない

機甲前進

烈日の黄塵を衝く
無限軌道の美しい軌跡に
兵隊の激しい闘志は
ぐわうぐわうと燃えてゐて
砲塔が花のやうに旋回する

天蓋をひらき
呼べば、美しく笑ふ兵隊の
振る旗もあざやかに
いちずな祖國への激情をこめて

えんえん戰車隊の段列はくる

灼けた陽は
兵隊の貌をかぐろく焦がし
無限軌道の重い反響から
新しい風土の夢が產れてくる

敵稜線の火網へ
塹壕をこえてゆく戰車の一隊
火花ふく砲塔には旗たかく上げ
戰場のきびしい秩序に戰ひつづける

國境前線の歌

(1) 分屯隊

原始紀層から產れた
草莽のいのち
分屯隊の
朝の調錬がはじまる

國境から
戰ふ祖國をおもふ
だだつぴろい凍土地帶の
朝の兵舍に

蒙古包から
子供たちが遊びにきて
雪の地平線があかるい

ソ領から
國境こえて流れくる雲
雲をみてゐるとなぜか胸あつく
ヴォルガの舟唄をうたつて
草あさく萠ゆる日へ
とほく民族の消長をおもふ

ざつくざつく雪ふんでくる
防寒服の兵の

どの貌もみな若く
私は、
祖國をとほい街にゐる

對岸には
斷續するトウチカがあり
その不氣味な靜けさに
國境を守るものの表情が
ぢかに觸れてくる

用兵圖をひろげる將校の
雪焦けた貌——
トウチカに

凍土地帶の風が鳴り
ソ聯機の
鈍い爆音の移行する方向へ
銃眼からぢつと呼吸をひそめる

トウチカのうへに立ちあがり
地平線のとほい望樓へ
ほういほういと呼びかけると
兵隊の歌ごえが
どこからとなく聽こえてくる

(2)日　記

終夜——

こつこつ舍外をまわる歩哨の靴音に
守られてゐる
ソ滿國境

一ぽんの蠟燭をめぐる
兵の圓陣
火と燃ゆるその意志にふれ
銃眼からのぞいて
北の星を知る

大蒜を嚙る兵
凍空に電鍵を叩く兵
重機の占める位置を確かめ

銃眼を透す月明りの中で
ごろり眠る

狙撃兵の眞赤な軍帽が
双眼鏡の焦點へ
突如、現はれた、と——
草深いトウチカの銃眼から
ソ聯兵の移動を
克明に記錄した、と——
國境を守る兵の
日記には書いてある

日本列島

神います國

父もなく　母もなく
きやうだいもなかつた
天皇の下に戰ひ死す
民族の嗚咽のゆえに
國おもふこころは現身(うつしみ)の火柱となり
必中雷擊の巨彈となり
眞珠灣の曉を劈いて
アジア同天の歴史をゑがいた

十二月八日未明——

敵國降伏の悲願に一億が慟哭するとき
荒天を衝く八幡菩薩の大編隊は
暗愚魯百年の牙城へ
どうどう殺倒して
世界の戰慄を告げた

國土の夜明けは
ほのぼのと美しく
凛烈として、天に霜はきびしかつた
草莽のいのちは
天皇陛下のおんまへに死なうと
青天にぢつと直立し
ああ、光榮の日はきたと

どの貌もなみだに濡れた
美し國よと
神々の讃え給ふた日から
まつろはぬ國を押しわたる日の御旗
その旗の下に
かぎりなく燃ゆるものをおさへ
神軍はや征きて西太平洋に戰ふかと
十二日八日、み民われの眦を決し
個の生死を超えて
神います國、日本の神靈に祈りつゞけた

特殊潜航艇

烈乎として
揺るぎない生死の境にゐて
それは、はるかに思考の限界を超えたもの
赫燿として
不滅の生死を歴史の公轉に刻んでは
ああ　特殊潜航艇といふ語感の

一億生死の間にひびきくるものの
特殊潜航艇といふに
月の出二分、敵艦アリゾナ轟沈の火柱は

神采奕奕としていよよ天地にきびしい

日本列島――
ああ、日輪の發するところ
それは特殊潜航艇であり
大和民族の必至である

悠容として死にむかふもの
特殊潜航艇――
それは、國家への最高意識であり
生死への絶對であり
人間の倫理と科學のより高きものへの昇華である

美しき歴程へ征きて還らざるものを
特殊潜航艇といふ
それは、距離と空間へのはるかな飛躍であり
神へ美しい醇化の貌である
歴史の振幅の
かかる極みをこそ想ふ

コタバルの火

我々はコタバルの火を忘れまい
その火はえんえんと燃えつづけて
マライ電撃の烽火となつた
我々は、南支那海を
一路南下する
海の兵團をおもひ浮べよう
別盃をあげて
肅然、風雲に臨む兵がゐたのだ
月あきらかな海濱の砂を嚙み

箭のやうに鐵舟が達着する
あはれ、笛の音にも似た彈音に
忿りにもえた兵の眸をおもふがよい

凄さまじい風が起る
青吊星を噴きあげて
兵のまうへで炸裂する光芒
砂壕を堀り
必死の境に現身はゐたのだ

鹿砦を超え
電流鐵條網を超え
火焔放射器をむずと摑んだ掌が

敵銃眼に肉彈となつて打ち俯す
ああ、日本兵の痛恨は凝つて
阿修羅の突喊となり
マライ電擊の夜が
ほのぼのと明けていつたのだ
我々は、コタバルの火を忘れまい

舟艇移乘

南海の涯に
撃滅の炬火あかあかと燃え
殉忠凝つて雪崩れゆく
海の兵團

別盃をあげて
蟲の如くに靜けき兵
生もなく死もなく一如
寂として
ただ舟底に笑ふのみ

天は明けたり
船團は旗を上げたり
舟艇移乘する兵の
眦しとど飛沫に濡れ
烱々たる眼底に
烈々たる氣魄のいかに若く逞しきかを想へ

海

海が鳴る
新しい秩序の聲が
その海を越えてくる

旗は紅く、へうべう風に搖れ
海のむかうから
兵隊の輝やかしい隊列が
夢のやうに光つてくる

海は民族の言葉を知る

逞しい百萬の跫音が
けふも潮騷のなかに聽え
戰ふものの美しい軌跡を殘す

南の地圖に、北の地圖に、
激しい神々の慟哭よ

いくたびか流氷を越え
あゝ、いくたびか赤道を越え
白い飛沫に濡れた掌で
晴天の陽を指さすとき
兵隊の眸のなかで
また、海がしづかに鳴る

肉彈

肉彈　肉彈
肉彈　肉彈
肉彈
シンガポールへ
シンガポールへ
神である
荒神である
南下する電擊の五千キロ
肉彈　肉彈

肉彈　肉彈
肉彈
コタバルへ上つた
スリムも突破した
橋を架けろ
橋だ
橋だ
戰車がゆく
歩兵がゆく
砲兵がゆく
團子だ
團子になつて楔を打て
神である

荒神である
これは人間業ではない

肉彈　肉彈
肉彈　肉彈
肉彈

包んで擊て
圍んで斬れ
一兵も逃すな
百年の敵だ
憎い奴だ
進め
進め

シンガポールへ
シンガポールへ
蹴散らして怒濤の七十日

肉彈　肉彈
肉彈　肉彈
肉彈

燃えるぞ
燃えるぞ
シンガポールが
燃えるぞ
この水道を渡れば
シンガポールだ

東亞侵略の
シンガポールだ
今に見ろ
シンガポール
陽動して神算の五日間

肉彈　肉彈
肉彈　肉彈
肉彈
強行渡河だ
しやにむに渡れ
擊つてくる
擊つてくる

ブキテマだ
三叉路だ
突つ込め
進め
何糞
何糞
頑張れ
頑張れ

肉彈　肉彈
肉彈　肉彈
肉彈
白旗だ

白旗だ
陷ちたぞ
陷ちたぞ
無條件降伏だ
萬歲
萬歲
天皇陛下　萬歲
大日本帝國　萬歲
萬歲　萬歲
萬歲

幕　舍

霧がしづかに霽れてゐる
樹林をぬけると
幕舍が點々と白く
楕圓の湖が
ねつとり油のやうにゆれる

キチキチ山の鳥がなき
起床喇叭がさわやかにきこえる
あれは、幕舍の兵を起してゐるのだ
湖のむかうから

美しい朝燒けの雲がのぼる

青い樹液のしたたりに指を染め
石を投げる
石は日の射すほうへ傾いて
ふかく蒼い水音をたてる

樹葉を透すひかりの縞に
機銃點射の彈音が谺する
秋日はぬくく
波紋ゆるやかに湖をめぐり
軍靴のあとが泥にいくつものこつてゐる
南の戰ひは、けふも激しくつづけられてゐるのだ

神話のやうな草木のひかりに
夢のやうに、軍裝の兵が現れる

訣別

はだかの背なかが美しく光る
兵に召されてひさしい友と
訣れの日を海にきて
眞日のしたで南の戰さを語る

兵がさしだすほまれを抜き
顏よせて火をつける
南溟を走る決意の烈々として
激しい海鳴りがよせてくる

八月の風べうべう晴天に鳴り
兵とふたり佇つ砂丘——
日照りはげしく、齒をかみしめて
訣れの言葉をさがす

砂丘のうへで、ふたり
白い風雅の貝殼を拾ひ
永遠のいのちを語るとき
海は、かなしく日を呑んでゐる

星章

砂になみだをたらす
赤道をこえて
その殉忠の凝つて必殺の體當りになれと
日本列島をわたる海鳴りの中へ
けふも、ひとりの少年飛行兵をおくる

北を守り　南に戰ひ
胸にきりきりひびく兵隊の齒ぎしりよ
透明な空中魚雷の膚を撫で
大君の邊にこそ死なめと

新しき隊伍の列へ
君は、遥しい軍靴の音を揃へる

美しい神話の日——
海鷲といふ
かかるきびしき言葉の極みに
淡々と死ぬことをいふ兵隊がゐて
わたしは白いひるがほの花をみてゐた

青い海がゆれ
旗がゆれ
炎天の陽炎にいのちが燃えてゐた
砂丘をこえて訣れの日の

あの輝やかしい軍帽の星章が
記憶のどこかで
いまも波のやうに打ちかへしてゐる

南の海圖

南の海圖をひろげて探す
ツラギ海峽
――この夜、戰はれてゐるツラギ海峽

敵艦隊ひそと眠るツラギ海峽へ
わが艨艟の砲座は
ぎりぎりの頂點にゐて廻り
――この夜、朱い月がのぼる

わが必殺の誘導機が

敵艦隊のまうへに落す青吊星
毆り込んで
その照明下に飛沫白い艦列
――この夜、朱い月がのぼる

撃ちに撃つ彈道の凄愴さに
露出された敵艦腹へ
ごおつと魚雷が命中する
敵艦がざくろのやうに火を噴いて沈むのだ

火を噴きながら沈まぬ敵艦へは
直角に迫り
うぬとばかり

さらに巨彈を撃ちこめば
ずるずる海底へ
美しい轟沈の姿勢で沈むのだ

戰へば捷つ國に生れて
砲聲いんいんこの夜の耳朶を打つ
ああ　ソロモンをゆきて神となり給ふか
一億なみだにぬれてツラギ海峽をおもふ

戰友愛

南方に油田地帶が燃えてゐる日——
ぼうぼうと肉桂を嚙んでさみしく
草木の青
空の青
ゆるされぬ規律のゆえに
せめて兵隊の言葉など使ふてみる

烈風のなかの朱い太陽
やさしく土になみだをおとし
北をおもふ憂愁の

ときに激しき怒りとなれば
美しい記憶のうへをゆく隊列へ
日本の旗をしかと打ちたててやる

逢へば、烈々の氣魄を語り
少年の日の童畫のやうに
君は銀輪部隊にゐて南へ發つた
炎天の砂礫を踏んで限りなき前進よと
訣れて、想ひはるかに崑崙を越える

ソロモンに戰ふ

日本列島から
南へひき放つ三千浬
その距離を計つて
我々は、ソロモン群島をみる

この廣袤のうねりに殘す航跡を索めて
激しい哨戒の幾日かがつづけられ
敵發見の無電に
一瞬、必殺の羽搏きとなつたであらう

海と空のまつぴるま
誘導の針路へ進入して
ぐわうぐわう彈幕を衝いた
わが海鷲の堂々たる大編隊をおもふ

見敵必殺のいのちは
赤道を越えて死ぬときも
陛下萬歳と必中の魚雷を抱いたか
かかる日の太陽のかがやかしさよ
大本營發表は　嚴かに
自爆七機、といふ

空征かば

兵隊の血潮にあかい南の地圖——
その地圖をひろげ
自爆二十一機の地點を探し
凛烈とゐて、言葉もない

空征かば雲染む屍と
火の彈幕を衝き
たちまちにして轟沈する
ああ、赤道はるか必殺のいのち
兵隊の忿りの聲がきこえるやうだ

向日葵の花ひらく
この日を
ソロモン群島沖の海戰に
絢爛として戰ひ死す
ああ　自爆二十一機——
灯を消し
啾々として、そのときのまのいのちに哭く

花

濠洲本土攻略をまへに
この朝
しづかに花が散りつづける
太平洋の蒼いうねりや
みぎは低い密林や――
地圖をひろげ
わが爆撃機の襲ふ地點へ
深慮遠謀をほしいままにする
何時の日にか

アラフラ海をわたる船隊
お召なきわれもそのひとりぞ、と
短劍を砥げば、うつつなく
鋼(はがね)のいろ
秋天を映して、いよよ冴え極まり
朝刊には
幾日も爆撃の日がつづく

日本列島の秋

北から南へひき放つ弧線に
けふもあかい烈日を印し
戰ふものの慟哭よ
兵隊の言葉が火のやうにふるへる

さつさつ海面を刷いてくる波と風
砂丘をわたり
劍のいろに似た貝がらを探す
ひらひら雲がひかつてくる

日本列島の秋
いくたびか巡る季節を
征く兵の逞しい軍靴の音だ
想ひせつなくて振る旗よ

南の空のあかるさに
けふもまた召されぬいのち
ぢつと耐えてゐる痛恨に
マレー派遣の兵の音信がとどく

友はみな召され征き
日毎、南北に烈しい風の抒情
るる・るる・房總の海鳴りに

季節の花は散りつづいて
日本列島の秋は深い

血闘

密林に戰ひ
敵に挑み
人智を傾けての血の刻苦——
喰ふに食なければ
草を嚙り　雜根木皮を嚙り
土さへも喰ふ
撃つに彈丸なければ
神算を用ゐて敵を計り
肉彈を以て突撃する

敵機の跳梁下に　巨彈雨注の間に
醜の御盾として
克く邊陲一線の壕を守り
陛下萬歳を唱へつつ
命あれば
莞爾として敵中深く挺身して散る

孤軍力戰、擊ち擊ちて止まず
神武劍星を仰ぎては
三千年の悲願をおもひ
忠義の父
忠義の母
その父母にとほく

太古の土に純血の記錄をつづる

ああ　ガダルカナル
太平洋の地圖に探すには
餘りにも眇たる一孤島
この點在を挾んでの血戰に
すめらみ軍(いくさ)の防人なれば
帝國陸軍の精粹を
ここに發揮していよいよ强く
頑として、蝟集する雲霞の敵を破る

社頭

天にたかい鳥居の下
白砂を踏み
こころにわかに悲しく
血にぬれた君の戰歴をさがす

國のための壯美に死んで
君は、いま靖國の神と祀られてある
貌あげて
その聲をきき
菊花あざやかな天に祈る

いのち國にささげて死ぬ、と
歴戰の地に雄々しかつた君をおもひ
ながらへて現身(うつせみ)の無爲を恥ぢつつ
高く白い雲層をみあげた

戰友星

あのやうに輝やかしく
ひむがしに昇天して
星となつたのか
戰友よ

江南の壕底で
錆びた銃把を抱きしめながら
中國を語つた、あの夜から
訣れて
君は、日本の空へかへつた

四季をりふしの
窓をたづねて
ひむがしにかがやきながら
神さびたひかりのままに
ぢつとみてゐる
ああ　あの星よ

コトバ

天皇陛下バンザイ　トイフコトバハ
日本人ダケノコトバデアル
尊イコトバデアル
老ヒタル父モ母モ
コノコトバニ子ヲイマシメタ
ソシテ、リツパナ兵隊ニソダテタ
私ハ知ツテヰル
南ノタタカヒニ
北ノマモリニ
コノコトバノママニ

死ンデイツタ兵隊ノアルコトヲ
天皇陛下バンザイ　トイフコトバハ
マコトニ、世界無比ノコトバデアル
コノコトバヲトナヘルトキハ
オクビヨウナヒトニモ
勇氣ガリンリント湧イテクル
シタバカリムイテヰルヒトモ
シヤントスル
ダレデモ、リツパナ日本人ニナツテヰル
タトヘ彈丸ノシタハクグラナクトモ
忠義ナヒトニナロウト決心スル
天皇陛下バンザイ　トイフコトバハ
日本人ダケノコトバデアル

ジツニ、アリガタイコトバデアル

ふたたび十二月八日を

十二月八日の天を
あのときを
怒りのいろに燃えた日を——
その霜のいろあざやかに
決意ある日のまた巡りきた

三千年の歳月のいかしさ
日本のいのちと生れてしづごころなく
國土につながる現身を
宮城おんまへの大地にひれ俯す

み祖へつづく幾萬の跫音は
生死一如の心魂に徹し
天皇陛下のおんまへに死すと
まだ星多い天地に祈る

一天萬乘の大君ましまし
曉闇のかなた
天馳けりゆく神々のみ姿よと
天を仰いで私ない

宮城おんまへの玉砂利を踏み
夢か　現か

南北の兵の雄叫びをきき
滿身に轟きひびきくるものに
怺え、怺えて、ぢつと涙をおとす

軍事郵便

アリューシャンを護つて
氷の宴に波の囃子だよ、と
あの日訣れた友からの音信

渠の決意は
この短い行間に燃え、溢れ
じいんじいんとひびきくるものは
北の平和を亂すものの跫音であらうか

雪や　風や　濃霧を

鐵板のやうな胸にうけとめ
アリユートの髭おほい民族を見下して
平然と、渠はツンドラを喰ふだらう

一まいの軍事郵便から
私は、日本海流の神祕をおもふ
それは北をめぐり流れて
雪やけてくろい渠の風貌を映し
米本土の痩せゆく岸を
日毎、鋼のやうに削つてゐるのだ

白衣兵

對空監視の兵と
白衣の兵と
美しい君達の戰歷をひめて
春の雲が流れる

南北から神々の聲
兵に召された日からのいのちではあつたが
傷つき、病み、いまは再起の日へ
白衣の兵の脚の金具が鳴る

鐵を切る音がする
鐵板を積んだトラックが駛り
軟風に、ほまれの火をつけあふて
白衣の兵の虔しく

兵の掌はかたく
敵を擊つこころにねて.
義肢を鳴らし
しづかな眸にむかふ
國土の春

社頭祈願

至純の匂ひをこめて
また、花の四月がきた
靖國のみ社に仰ぐさくらは
ことに氣高くかがやかしかつた
萬朶とみだれ
古武士の風格さへほのかにみせて
遺族のひとらが
敬虔な祈りをささげる一刻(ひとと)を
しづごころなく散り積むのであつた
私たちは

花の四月になると
この聖代に生を享けたものの
さらに戮力して戰ひ捷たねばと
み社のさくらの下にひれ伏して
こころ新たに祈るのである

ジヤカルタ放送

油の海を渡つて
荘重な神々の軍樂が
日本列島から奔流していつた
南へ　南へ
季節風のやうに
假借ない怒りをこめて
汚辱された風土を洗つた

今宵、ジヤカルタからの放送に
千早塾の子供たちが

日本の歌をうたつてゐる
同祖同族の民よと呼びかけて
電擊九日の奇蹟から
銃火のなかの逞しい生誕——
ああ、いまは皇風洽く
日本の歌が
電波に乘つてきこえてくる
ジヤカルタの風流よ

えんえん燃ゆる赤道直下の太陽に
日本の旗が鮮やかに光り
みんな美しい表情で
日本の歌を

いつもうたつてゐるのだ
君ケ代
愛國行進曲——
彷彿として
想ひは萬里を超える
アジアは一なり
先覺圖南の夢は
まことに、昭和天業の現實であつた

南をおもふ

私は、南をおもふ
南をおもふて
密林の暗い茂みをおもふ
軍靴の重い響きが
兵隊の荒々しい呼吸と共に
ずしんずしんと鳴つたであらう
視えない敵から
撃つてくる銃彈に
齒をくひしばり
一寸刻みの前進をつづけたであらう

私は、南をおもふ
水漬く屍を呑んだ蒼いうねりや
スコールのやうな彈幕をおもふ
瞬間
（私は、魚雷となり巨彈となり
そのなかへ突擊する）
そして
敵艦めがけて火の現身と碎け散つたであらう兵の肩を抱いて
み軍のかがやかしさを語るであらう

私は、南をおもふ
（私は、すでに一本の電流である）

ビルマへ駛り　泰へ駛り
マレーへ　ジヤバへ　セレベスへ
スマトラへ　ボルネオへ
點在する島の一つ一つに
日章旗がへんぽんと上るのをみる
颱風のやうに
凄さまじい勢ひで
この島々の一木一草をも洗ひ去つた
潮やけて逞しい日本の兵隊たち——
新しい種子を播きながら
南へ南へと
神代のままの進軍が、いまもつづけられてゐるのであらう

馬來の音信

遠くで雷が鳴つてゐる
馬來の音信を手にして
私は、電擊の七十日をおもひ
激しい硝煙の匂ひにむせぶ
戰場は遠くとも
南の海溝をこえて
決意の言葉はかぎりなく凛々しく
淡々と死ぬことを書いてゐて
一枚のハガキに
馬來派遣の風懷を託す

ああ　遠くで、また雷が鳴つてゐる

下駄

戰地ノ
兵隊サンニヨロコバレルトイフ下駄
イツモムツツリヤノ下駄
キハメテ簡素ナセイカツニマンゾクスル下駄
ケツシテ不平ヲイハナイ下駄
ドコヘイツテモオモヒダス下駄
雨ノ夜ノ
晴レタ日ノ
日本人ニハカレ
日本人ノココロモチヲヨク知ツテヰル下駄

ブアイソデハアルガ愛スベキヤツ、下駄
私ハ
四角ナ下駄ヲハイテ
キチヨウメンナ生活ヲシ
イツモ兵隊サンノ風流ヲオモフ

草枕

花火があがる
草に　ぢつと身をひそめ
草の根をかじりながら
野戰の血の匂ひにむせて
あの日の軍裝の重量をおもつた

お母さん——
何處からか　そんな聲が
風に流れてきこえるやうで
私は哭いてゐた

とほい戰地の兵隊よ
赤腹の壕をこえ
草あつい風が流れる
兵隊の言葉で
せつなく、みんなみの戰さを語るとき
いつか武裝の私だつた
褪せた戰帽のしたには
ラツパ草の花がゆれ
迷彩トウチカのむかうへ
戰友の名を呼びながら
うつつに、つはものの汗を流してゐた

草に哭く

草をむしり
草をむしり
生きて　いま
いのちの彈音をききながら
ああ　私は兵隊になりたい

召された日から
還らぬ覺悟のいのちではあつたけれども——
草にねて
戰友の名を呼べば

みんなみの國は
殘照のかがやくところか

草の芽はあまく
唇ひびく　草の芽よ
べうべうと嚙めば
ひとりゐて　せつなさに
ああ　私は兵隊になりたい

認識票

戰果のかげにおもふ
兵隊の貌
どの貌もなみだにぬれ
確かと銃劍を抱いてゐる

風雪の日には
戰場にながした血の
歳月をこえて
まざと耳朶をうつ

いまは、孤愁に耐えがたく
泥にまみれた戰友の掌の
かくも露はな記憶となり
行李の底に
錆びた一まいの認識票を探す

悲願

悲しみは
水のやうに昧爽の空を流れた
この空の　はるか彼方
血に染めた旗を巡り
旗に哭く兵隊のあることを

私のこころを洗ふ
神々が國産みの物語――
新しき軍裝の兵が征きてより
北の戰さは烈しくなりぬ、と

機銃點射の彈音を　きけば
君の忠義をおもふ

雲は白く去來して
とめどなく想ひはあふれ
ああ　北よ
北の憂愁よ、と
ときのまのいのちに哭いて
私は、氷雪の歌をうたつた

北門鎭護

濃霧のなかに明け暮れる日と夜を
戰ふてゐる神々の軍勢
はるかに北の要害を守り
不毛の島の瘴癘に耐え
鐵壁の陣を白夜に張る
日本海流と親潮の搏つところ
混沌としてオーロラーは燃え
北斗に遠征の志を賦して
忠勇の兵は屯してゐよう
我等、欝然として

南の捷報に涙するときも
氷雪の果に鎭護して
艱苦する兵のあるを忘れない
備へは常に盤石であり
呼號して虛勢の夷らが
北を臨んで我を襲ふならば
憂然、日本刀の鞘を拂ひ
邀へてその命を斷つのみである

戰友よ

戰友よ
いま　ソロモンの孤礁か
アリューシャンの鳴神か
印緬國境の密林か

遺書を書き
遺髪を納め
銃劍が美しく光つてゐた
屯營出發の前夜――
他愛ない話の果

あの若い分隊長をかこんで
子供のやうに彈んでゐた
戰友よ

灼けた黄土に花がひらいて
日毎に、空が青かつた
逢ふときは靖國のさくらの下でと
伏射の壕を蹴り
突擊した阿修羅の幾山河
四季の風物は落莫としてゐたが
戰友よ

不甲斐なく殪れた

後送擔架の傍により添ひ
慰めて訣れていつた
高い靴音
では、前線で待つと
握り交はした掌は、いまも
戰友よ

星のきれいな夜だつた
軍病院の庭だつた
春あさい風の便りに
君は南へ下つたと
地圖をひろげて泣いたのだ
戰友よ

銃後に還り　三年
十二月八日の霹靂から
とほく雲煙の戰場へ
美しい隊伍の列をおもひ
百年の敵を打盡する勝鬨に祈るのだ
戰友よ

神去りぬ

萬葉集一卷をふところにして
常の如くに戰場へ發たれた
それは、機上で
旗艦の艦橋で
長官室の
飾りなき机のうへで
陣頭指揮の日々を讀まれた
知人への便りにも
自作の諷詠が添へられ
武將の雅懷をしのばせた

戰場の常として
寧日ない神算の起居にも
暇を萬葉集の一卷に託され
防人のこころにゐて
アジアをかくも偉大ならしめられた
座右の銘を
常在戰場としてをられたが
接するひとみな
その溫容に春風をかんじ
神州にこのひとありとして
泰山より重しとしてゐた
雄渾なる發想は
神の如き智謀より出でて

醜草みなおそれ戦(おのの)いた
大東亞の守護神として
生きてすでに神であつた
萬葉集の一卷を播くとき
日本人の魂の精粹をみることができる
ああ、ここに心身を淨化して
生きてすでに神であつた
機上戰死の報至るや
一億は聲をあげて痛哭した
しかし、嘆く莫れ
一億のなかに
その血は烈々と燃えて
いまも我等を叱咤してゐるのである

萬葉集の一卷に悟入された
その荒み魂は
世界の修理固成なるまで
永久(とこし)へに、神州の天を護るであらう

——大本營發表（昭和十八年五月二十一日十五時）

聯合艦隊司令長官海軍大將山本五十六は本年四月前線に於て全般作戰指導中敵と交戰飛行機上に於て壯烈なる戰死を遂げたり

アッツに死す

海面を這ふやうに
深い濃霧がうまれる
黒潮のうねりが
その濃霧の深さを透して
日もすがら吼えつづけた
四季のない四季を迎へて
季節は
春にまだ遠く
わづかにツンドラに萠ゆる
鮮苔植物の色調と

アッツ櫻のうす紅が
屯するつはものの胸を染めたといふ
備へて、岩に砦はかたく堀られてゐたが
襲ひくる敵は二萬
もののふのよき死にどころ
萬代までも名こそ惜しめよと
皇のみことをかしこみ
ツンドラを削る無限軌道に
火のやうな闘魂を燃やしたのだ
ああ北を臨めば雲漠々
勇武のつはものはここにゐて
孤軍力戰、氷雪に生死を盡し
この日、壯烈アッツに死す

軍旗の下に

み戦は　北に進みて
黒潮の　荒ぶるところ
皇の　みことかしこみ
嚴然と　ここに屯す
神兵二千

ひむがしは　日出づるところ
拜みて　太刀執りぬけば
備へまつ　岩の砦に
邊へたり　暗愚魯の

醜敵二萬

もののふの　名こそ惜しめと
みつみつし　久米の男の子が
花咲かぬ　北の春をば
あかき血に　染めて戰ふ
軍旗の下に

はるかなる　北のアッツに
玉碎す　山崎部隊
忘れめや　五月三十日を
み民われ　撃ちてし止まむ
萬代かけて

旗

風は地隊を吹く
地隊を吹いて
兵隊のかなしい怒りの
靴跡を洗ふ

旗は、天皇の軍(みいくさ)のうへに
へうへうと鳴り
地隊に、影をおとしては
風の重さに哭く

風のなかに
兵隊の靴跡は
いつか、白く乾き
旗だけが、へんぽんと
東(ひむがし)へひかつてゐた

神々の翼

君の掌はかたい
岩のやうに、鐵板のやうに
その掌が
隼の操縱桿を確かと握り
見敵必殺の血にふるふとき
日本の空には、神々のうたが流れる

死生命あり、と
かへりみぬいのちの掌
指さしては、祖國の旗に祈り

その血につづくひとたちに
日本のとほい神話をおしへる

南北へ、はるかな圓をゑがく
そこにソロモンの空の眞實がある
ちちははの美しい傳說に洗はれて
火の銃身を抱きながら
君の掌は、太く逞しく
決戰の空へ、現身は
神々の翼のやうにとんでゆく

決戰の空へ

いくたりかの友を送つた
あの空へ
あの空のむかうへ
雲染む君の屍かと
けふは、また、ひとりの友を送る

南の北へ雲はしろく流れ
海のほうから
とほいみ祖の血が呼んでゐた
錆びた記憶をかなしみながら

肩章のかがやかしさにふれ
君が還らぬ覺悟を知つた

やさしい言葉が
火のやうに語られた、この日
ああ　ひとりの友は
あの空へ
あの決戰の空へ
神のやうに、しづかに
白い手をふりながら發つていつた

草莽

草莽

微志あり
道を求めて慟哭の高きを知り
半生に顧みて榮達をねがはず
まつろはぬ國の洋夷撃ちてし止まむと
四疊半に謙虚に生きて
肉身を愛して今日を懈らず
喰ふに、一椀の玄米の飯に足り
配給の魚菜の一皿に愉しむ
わが生計の日々　斯くも虔しく
時に、季節の花の紅(くれなゐ)を飾る

天を仰ぎては
演錬のとほき爆音に
神となります火の現身よと
いまは草莽の雄ごころを
國にむすび　み祖にむすび
この血あげて悔ゐなしと
極みなき鳴咽にむせぶ

腰間に佩く劍はなけれど
十二月八日、永久に忘れず
あの儼しき霜の凛烈を
大いなる天つ日の耀きを

生死かけて子孫に傳へ
美しき風土の捷ちゆく民ぞと
わが職域のまことに生きて
八紘の大いなる經綸を論じ
膽据えて清しく暮す

郷土

屹然として高い山
清濁を呑んで澄む川
純朴の民がねて
靈に埋れて耕す
百年も千年も
土に堅い根を張り
風雪に忍苦して
一粒の米を育て
遠いみ祖たちのやうに
曉天に祈る

流離の日——
不圖、なつかしく切ないのは
父母の言葉であり
太古のままの
天然人情である
美しい家系の習慣は
私らの血をつねに純潔に守り
何時までも
何處にねても
山紫水明の風情を忘れさせない

阿蘇の風貌

(1)　一月七日の阿蘇

創世のすがたのままに
青天に構へる雪の山容となり
冬、阿蘇の巨(おほ)く
山と山　まはだかの色に重なる

外輪山を巡る原野の幾里を
日に傾いて區劃された殖林地帶
すすき白い飛沫にゆれ
山と山　屹然とありて高い

天に聳つ谿の深さ——
雪崩をみせた山襞へ
切り削ぐ風の迅(はや)さに流れ
國境へつづく肌赭い村道を
放牧の牛が走る

裂帛の天　泌みて青く
神靈火となる山を仰いでは
神々の雄らび全身に凍り
ああ草莽のいのちわれよと哭けば
阿蘇、うつつに天を抜いて高い

寒風凛烈として
原生林をあらふ一月の太陽――
この國原の神々を血肉の中に信じて
國産みの力溢れ
この日、阿蘇の草千里を走る

(2)一月十一日の阿蘇

肌荒い山の道
ゆけば　すすきの風となり
君と私の愛怨よ
肉身にかなしむ、冬
樹々に鳴る風かときけば
すすきの白い

慕心ほのかに虔しくねて
土あかい山道をのぼる
すすきと風――
言葉やさしく
青天の陽のしづけさに
石多い道となる

冬の五岳に谺して
鳴りやまぬ樹々の雪風とゆれ
北から疾風(はやて)
落葉に冬の色感を重ねて
蕭條と山はある

頂上から石を投げる
山にかすみ
呼べば　落葉の風となり
外輪山に衍して
かなしい君の眞實よ

風の山

朽ちゆくもののいかしさに吹き
山から海をとほくみて
千年の村や町——
一月に枯れた落葉のしづけさを踏み
君の眞實をいふ言葉

冬の裾野へ灯をともし
雪の五岳へいくたびかまた呼んでみる
慕心あはれに、いまはひとり
君の掌をかさね
君に誓へば
落葉、私の寂心に凍る

(3)一月十八日の阿蘇

地表に低い山々の力感——
青天に雪光り
旅、放牧の馬群をみる

火の國、神代ながらの民は住み
殉忠の歴史に
父祖の怒りよと流涕してやまぬ
ああ、天に燃え　神の國日本に聳つ
秀麗、雪の山容にひた壓される

外輪山脈の
美しい感度をみて
開墾された裾野ひろい列車の振動にゆられ
原生林の青い空間を抜けると
一月、まはだかの山がある

開墾田が車窓にひろがる

外輪山脈の頂き平面に四方をかこみ
中天に火を噴く山々に
しんかんと日が照りつづけ
戰ふ國のいかしい歳月を
霧にうもれて耕す民がある

竹林の日かげに　雪はしろく
蕭條と枯れた原生林——
樺色の山襞には
滲むやうな日射しが流れる
ながいながいトンネルを走り
トンネルを抜けて
暗い斜面の林に入る

眼下にあかるい原生林の傾斜となり
この山の神々を懼れつつしむ民
原野に五穀いのちの土を起すかと
阿蘇、圓錐に噴煙するを見上げる

(4)二月七日の阿蘇

熔岩に土の堆積をかさね
方三十里のまつぴるま
人類の歴史にとほい神火を噴き
永劫の地殼に燃える山々

凍天に擦過する地鳴りをきけば

神います國土に
荒神の憤怒にも似て
地貌ふかく裂ける山肌の粗放をおもふ

朱い二月の太陽のました——
視度やや傾きながら
荒ぶる神の火を噴き上げ
曝露の正面、しづかに車窓を移動する

天日爽かな火の山を仰ぎ
雲上に雄叫ぶ神のみ姿よと
わが翼贊の雄ごころをふかく信じ
うつつに阿蘇の火を意識する

阿蘇の地貌はたかく
巨大な面積となり　私の眼底を巡り
方三十里の原野のまつぴるまを
原生林の重量にふかい霧を降らす

青　年

青年の純潔のために

そうだ、戰はう。
一本の燐寸がながく燃える

民族の血にびびと響く
わたしの眞理を
ながい歳月の
甘苦に育てる

純潔な思想が

あるときは、
鐵のやうに
この肉體を削つてゆく

純潔な思想に
削られ
土の匂ひが泌むやうに
秋。
落葉の重さを蹴る

未熟な
おのれの生理に
一日、いくたびも

嶮しい坂道をのぼり
旗をふり
清潔な愛情を
私の周圍の
幾人かの青年に信ずる

壯　年

卒先　挺身して國難に當る
精强なる五體
狷介なる魂
ああ　不屈不撓の前進をつづけ
火の結集を持つもの
これぞ壯年
國民の中核にゐて
國家廻轉の動力となり
家を負ひ
天下を負ふて

天皇の　負託に應へ奉る
壯年の言は重く
壯年の理智は深奥
壯年　在るところ
國家の規律は嚴然として產る
壯年はよきかな
壯年はよきかな
いまや　四海の濤荒く
暗愚魯の爪牙
國家の安危を覗ふとき
壯年起ちて
天下の耳目にあり
私を捨てて公に報ず

ああ　壯年はよきかな
壯年はよきかな
斯くて　百年鎭護の大計は成る

拓　土

開墾から收穫へ
凍土のうへの三年——
興安の大氣に
不敵の面貌を洗ひ
地平から地平へ
赫耀とわたる日の
しづけさに棲み馴れて三年——
荒れた男の掌が
百姓のよろこびを語る

別離の日から
祖國前衞の拓士となり
北は守りますと　はつきり言ふ
かくも逞しく成長した
若者を、眼のまへに
ぴしり鞭うたれる衝動にゐれば
土と戰ふ人間のはだかの性格が
ぐんぐん若者の體臭からにほふてくる

いまは、凍土に棲みつき
海へ戰ふ日がきても
南への思慕は言はず
百姓の言葉で北滿の土を語り

肩をゆすりながら
さくさくと新雪をふんで去つた

氣　球

曇天をゆけば
氣球が上り
尨大な青色體の面積が
しづかに方圓の位置へ移動する
私は、戰ふものの苛烈さに耐えてゐる

楕圓の面をもち
曇天ににぶく光る氣球
風壓の中に貌あげて
この空ソロモンへつづくかと

天の一角を占める色感へ
三月の鋪道から、百發の砲彈を意識する

精密の感度にのぼり
風壓の姿勢でゆれ
青い氣球が移動するとき
ソロモンの戰さを葬々とおもひ
するどい引力をかんじてゐた

工場地帶

噴煙する工場地帶
無數に
鐵の重量をかさねて
聳れる

ぼうぼうと陽が照り
ガスタンクが林立して
天に昏く
不敵な面魂の男らが
吊橋を渡つてくる

巨大な鐵の機構に
空と海の工場地帶
美しい迷彩に
集團體操のリズムが輕い

肉體を超えて
更らに、流れくるもの
貨車が
トラックが
鐵塊を運ぶ

屋上にたかいサイレン塔

國旗を仰いで
錬成の號令簡潔に
少年工ら
三百六十五日を
默々、精密の極點を削る

鐵、白熱に燃える
生産する掌の
どの掌も汗たばしり
可動起重機が
中空へ
力學の圓とまわる

しづかに波が洗ふ
海沿ひの岸壁を
僕ひとり歩く
工場地帶

職域

霜天に起きて
朝は、玄米の飯を喰ひ
わが一日の職域を
神聖にする

通ひなれた工場への
この道、
坂があり
勤勞のこころに生きぬくと
寒波の中をのぼる

校正のペンを走らせ
時を惜み
指あかく染めて
奉公の日を虔しい

冬のひなたに生きる蠅。
冷えしるき部屋に
風に凍える掌をかざね
わが翼賛の雄ごころを
校正の一字にこむる

ときに、放埒のこころを削り

戰ひのさ中
更らに一日を勤勞して
わが職域を尊しとする
階(きざはし)につむ洋紙の堆積。
しろじろと
冬。

賣らずの辯

母は病み
妹は病み
刻苦の流轉
人の世に染まず
屈せず
孤高の節を持し
風懷に託して
日に
一篇の詩を得る
賣らず

求めず
己れを守り
草莽の大義は
天に凝り
發して
一篇の詩となる

母は病み
妹は病み
切磋琢磨の行と祈り
されど
雄心磊磊
詩は賣らず

名は求めず
秋霜に
身はありて
誠忠をささげ
悲懷を
一篇の詩に投ず

鐘音

除夜の鐘の鳴らない
晦日の夜を
除夜の鐘をきかうと
待つてゐる、母とふたり
海に近い家は
暗い渦潮のうねりに軌み
乏しいながら
年越しの蕎麥もたべて
神棚には
標縄(しめ)を張り

燈心をともし
いつもより色黑い餅を飾り
二十六年の年月を
あらためて顧みながら
めつきり白髪がふえたな、と
幼ない日の母をおもひながら
除夜の鐘の鳴らない
晦日の夜を
たゞとへ、御國に捧げて
いまは聽く術もないと
知つてはゐても
ふるさとにかへり
過ぎゆく年月の罪業を清めよと

百八つを鳴つた
ふるさとの鐘の音を
こころの中に
しみじみきいてみようと
除夜の鐘の鳴らない
晦日の夜を
除夜の鐘をきかうと
待つてゐる、母とふたり

空　戰

ゆるやかな山稜と
四季なほ青い海にかこまれ
ふるさとの町の郊外に
飛行場が建設されて幾年
旅から旅の慌しい明け暮れを
ふるさとに來て靜かな朝夕だが
赤い翼の練習機が視野のかぎりに
終日　生彩ある爆音を轟かせ
吹流し白い機群が亂舞して
戰技演錬の火のやうな鬪魂が

私の腦裡にいまも生々しい戰果の記憶を呼ぶ
ソロモン群島に　ガダルカナルに
北はアリューシャンに　また印緬國境に
自爆未歸還の雄々しくも尊い幾機を
あの日からいくたびこの指に數へたらう
大東亞の天駈けて戰ふつはものの
烈しい敵擊滅の雄叫びが
天の一角から凄さまじく私を壓倒してくる
安穩の歲月を內地で送るありがたさに
今朝もレンネル島沖のその動をきいたとき
滂沱として熱い涙に壯絕の空戰をおもひ
皇土三千年の殉忠の歷史を守りぬき
共榮圈の新しい地圖に蹈りながら

萬里異境の地に水漬く屍となり給ひ
神となりませし荒み魂のかずかずに
　熱い禱りをささげ
旅しづごころない今日の日を
せめて數ならぬ草莽の身ではあるけれど
銃後に生きておのが務めに決戰をと
仰げば冬二月きびしい青天に
ああ　逞しくも太い新鋭攻擊機の爆音が
捷てよ捷ち拔けよとまた全身に響いてくる

空の防人

空へ挑む眼である

太陽の直射にも
棘のやうな季節の轉移にも
岩に刻まれた系譜のやうにぢつと動かず
瞠かれたままの　燃えてゐる眼である

洋上はるかの監視艇に
重疊たる山塊の起伏の上に
北へ向ひ　南へ向ひ

祖國を護る空の觸覺となつて
敵機を捉へる眼である

美しい海岸線の圓周から
尨大な青色體の氣球から
四季をりをりの音信を知らず
視えざるものを視
ひそかに迫る機翼の振幅を感じて
視度のかぎりへ放射されてゆく
空の防人の尊い眼である

遮光幕を下ろし
淵々として　この眼をおもふとき

本土爆撃を叫ぶ醜敵へ
百年憤怒の血が湧くのである

日本刀

鐵の原鑛は典雅である
百度の火に燒かれ
鍛冶して
粹然として光輝するとき
日本刀の風格は
無比である

春夏秋冬
日本の傳統に錬り
神州の粹に凝る

我々は、斷の一字を以て
これを表現する

不惜の理にかなふ
靈感の刀身は
一閃
秋霜の氣を發して
醜をまつろはしむる
日本刀の神秘は
ここにある

萬古の血をたたへて
四界に靈妙

日本刀は
實に、天下一品である

別盃

たぐひない門出の朝である。
麗朗として
一天極みない日の耀やかしさに、
傳來の太刀を佩き
千年の血に血を繼いで、
暗愚魯の醜を斬るべく
顧みぬ鴻毛のいのちである。
高鳴りやまぬ胸奥ふかく
海を渡る連勝百萬の兵の勝鬨をきき、
散るならば九段の櫻よと

半生の契にむすぶ恩愛を斷ち、
大君の任のまにまに戰ひ死す。
男子の本懷これに過ぐるものはない。
征くは北か、はた南か、
その何處かは知らないが
夙夜の太刀を研ぎつつ
髀肉の歎に待ち佗びた今日の日。
七たびを皇土に生れて
まつろはぬを擊ち滅すと、
決意新たに、この佳き朝を
天日赫灼として春爛漫。
擊つ國の遠きを言ふ勿れ
獸々として花に有情は託す。

防人の妻なれば、
防人の子なれば、
いまこそ、雀躍して訣別の盃をあげよ。

日本魂

匹夫一劍を帶び　雀躍して
大君の任のまにまに萬里の難きを征く。
憤怒相傳の醜虜を斷つに
相模太郎の膽を以てし、
海とほき瘴癘異境の歴程に
萬能の科學を超絶する。

日月を刻む石に坐し
營々として骨肉を削る　三年
毅力して心血を絞つた　十年

凡智を傾けて衆目に迷はず
七生かけての執念に生きて
日本魂の正統を守り、
阿片の戰ひから立正護國の百年を
蟄伏して動かざりし忍辱の日。

發しては　十二月八日を天駈けて
萬雷の如き奮迅となり、
まつろはぬ邊土の果まで
討ち平らげての修理固成。
綽々ソロモンの海を渉りてより
すめらみ軍(いくさ)蕭として南北に布陣し、
まさにヒマラヤの嶮を破らんとす。

洋寇なにするものぞ。
撃ち撃ちてその首(かうべ)を刎ねよ。
天祐昭々とつねに神州に凝るを知る。

春宵征途に賦す

君は、いまいで征くなり
征きて夷を撃つなり
夷の國は遠く杳かなれど
その歴程のなんぞ難からんや
我、春闌の宵を送りきて
また、君に別離を言ふことなし
晉に征きて戰ふべし
すめろぎの命を長み惟み
さばへなす夷を撃ちて
この國の手ぶりみせばや

嗟呼、春風爽かに天より來り
君が紅の頰を敲つ
快なり、快なり、快ならずや
はるかに聽く八百潮の轟きを
君を待つ百萬神兵の勝鬨を
我、君に遠征を言ふことなし
萬里の嶮を破る日の
顧みぬいのちをこそ愛しめよ
春宵花おぼろに月清し
君が美し妹も、君がうからも
双手ささげて、いま送らんとす
天駈けて怒れる神の雄叫びに
嚴しきこれの世のみいくさなれば

我、莞爾として送るのみ
君に、生死を言ふことなし
日の本の益良夫、君よ、
天の瓊矛を執り持ち
いざ、みいくさへ征きたまへ

草莽孤心

草莽の微臣といふは
言に易く　身に重し
われ、生を享けて　この世に在り
二十七年の旦暮には
親に仕へて孝ならざりき
或るときは　ひとを憚らず
不羈奔放自がままにゐて
戈を恃みて　力におごる
されど、かの日お召ありて
草露のいのちかけて銃を執り

兵馬空惚の間に戰ふ
戰ひて死すべきに
計らざりき　命ありて還る
わがいのち君にささげまつると
戰場をおもひ　銃後に生き
劍を抱くこころの　幾年
想ひはるかの九天に祈り
數ならぬ身の力を竭し
日々夜々、常住坐臥を
仰ぎては　九重のみひかりに
俯しては　み祖(おや)のみおしへに
國をおもひて熄まざるも
顧みれば、無形の罪はあまりに深く

啾々としてひとり悔ゐあり
宮城おんまへの玉砂利に坐り
あはれ草莽の孤心に哭く

歴史

國の歴史につづく血が
窟のまへに、がばとひれ伏したとき
悲愁のなみだとなり
いつまでも、草莽の私を泣かす

岩かげに、千年の苔はあをくさびて
幽邃の日月はとほい
ああ　建武元年十一月
かしこきひとは、ここに端座して
七生滅賊の志に凝り給ふた

ほのかに窟の丈尺はひかり
啾々として燃ゆる季節の樹葉
いかに激しき怒りの日かと
み姿を、うつつ拜みないて
石の楷をふみ凛然とひとり
この日、晴天の風に低徊する

鎌倉宮にて

願望

君に仕へて忠のひと、
親に仕へて孝のひと、
無私無我の草莽のこころに暮すのが
數ならぬいのちに秘めたねがひである。
二十七年の境涯は、顧みてみな
感謝報恩の日であれば、
世に拗ねず、ひとを憎まず
常住坐臥ひたすらに虔しくゐて、
友と交はりては信義をつくし、
肉身を愛してはよき兄である。

跋文

本書の著者福島氏から跋文として何かを記して欲しいとの依頼によりこゝに筆を執つたのであるが、併し本書の内容については、讀者諸氏が親しく之を味はれることにより、また著者自らが後記としてしるされたなかに最もよくあらはれてゐる殉國の熱情によつて、何よりも如實に示されてゐるので、恐らくそれ以上私の贅言を必要としないと思はれる。著者が詩歌を熱愛してゐられることは、後記の最初に述べられた言によつておのづから明らかであり、またそのなかに繰り返へされてゐる數言からもこれをしみじみと味ふことができる。私は著者が今後もこの道を歩みつゞけられるであらうことを確信するのである。

著者福島氏を私が知つたのは、先年某社の短歌雜誌に於て短歌の選を

してゐた際に、同氏の作品を推薦した折であつた。その際同氏からの書翰によつて、昭和十五年の夏に私が滿洲國新京で大同學院に講演に赴いたときに同氏もそこの事務室に居られたと云ふことを知つて、これも奇緣の一つと感じられた。私はその折教科書關係で二箇月ほど滿洲に滯在し、その間に大同學院から科學上の講演を依頼されたので、そこに赴いたのであつたが、もちろんその場合には同氏のことなどは知らなかつたのに、之が短歌を通じて相知るやうになつたことを想ふと、不思議に感ぜられるのである。爾後今日まで親しく往來してゐるのであるが、同氏がいつも詩歌を熱愛して多數の作品をつくられるのに驚かされるのである。同氏は今後もこの道を踏みつゞけられるであらうが、かくてその作品が益々向上の道をたどつてゆかれるのであらうことを、私は信じてゐるのである。敢て蕪言をつらねて本書の跋とする。

昭和十八年九月

石原純

後記

詩はわが生命なり、詩はわが生活なり。

この眞實のなかに、私の全てがある。この道は、遠く嶮しい捨身苦行の道である。私は、私の全靈をささげて、これからもこの道をいちづに歩みつづけるであらう。

この詩集は、まづ、ふるさとにゐて、深い慈愛の眼ざしで　天皇に仕へまつれと私を育てた母の、その病んで皺おほい掌に捧げたい。

そして、南北に戰さはげしい日、醜の御盾と出で發つた諸々のつはものの、その神となります現身の掌に捧げたい。

また、大いなる現世をあげて、天のした修理固成のために、神々の血を享けて戰ひつつある銃後一億の國民の、その火のやうに燃えてゐる熱い忠義の掌に捧げたい。

私は、いま、神々の美しい歌をきく。私の生活のすべてに流れるものは、三千年のながい歴史に純化されたみ祖の血である。この血をおもひこの血に慟哭するとき、私は神々の歌をきくのである。

詩の道とは、神々につづくわが身の、わが靈の、行と祈りでこそあつた。君に仕へて忠の人となり親に仕へて孝の人となる、ここに熱禱をささげて、儼しき世に戰ふてゆくことであつた。

兵隊をみろ、兵隊をみろ、と、私は自分自身にいつも言ひ聽かせる。そして、あの西南大平洋の血戰をおもひ、密林に鬪ふ菊花の銃をおもひ北方を指さしては日々に激しき戰さをおもふのである。

天皇陛下萬歳と、生死一如の境にゐて、この國のいのちのために戰ひ死す、ああその兵の壯美をおもふとき、私は地にひれ伏して哭かずにはゐられない。

兵に召されて、不甲斐ない白衣の歸還、そして、銃後に生きてまた悔

ゐおほいこの身ゆえに、暗愚魯降伏のための必死の戰ひが、日夜を分たずあの南北に戰はれてゐるのを、犇々と全身にかんじたとき、傷痍の身がいかにも悲しく恥しく、もいちど兵隊になりたいと、いくたびも激しい齒ぎしりに嗚咽するのである。

この詩集については、語るべき何ものもない。たゞ、私のこの悲愁が神に祈り、天に凝つたとき、このやうな形において、おのずから產れてくるのだといふことを、知つて頂ければ、幸ひなのである。

私は、默々として詩をうたつたが、これからも、默々として身みづからの實踐のなかに行と祈りをつづけながら、神へ悲願の道として終世を詩ひつづけてゆくであらう。

この詩集が、いささかなりとお國のお役に立つて吳れるだらうか。それだけを、私は心配してゐる。

出版のことに就いて、一方ならない御心勞を賜つた砂田社長や、私のこ

ころの師父と仰ぐ石原純先生や、過分の激勵を頂いだ大木惇夫先生、序文を快く書いて下さつた百田宗治先生、その他、事にふれて格別の御恩義を賜つた荒木精之氏や、私をいつも叱咤して下さつた幾多の志あつい先輩知友の方々には、この機會を以て、厚く厚く感謝申上ぐる次第である。

すめらぎに仕へまつるこころを、ますます切磋琢磨して　天皇絶對の悲願の下に、私は草莽の身のいささかの力を捧げてゆきたい。

昭和十八年初秋

南北にすめらみいくさ激しと哭きつつ

福島青史

發行承認番號
イ320012號

製複許不

詩集『兵魂』奥附

昭和十八年十二月二十日印刷
昭和十八年十二月廿五日發行（二、〇〇〇部）

(價)定價金壹圓八拾錢
特別行爲稅相當額八錢　合計金壹圓八拾八錢

著者　福島青史
東京都四谷區舟町十四番地

發行者　株式會社軍事界社
代表者　砂田茂

印刷所　東京都牛込區早稻田鶴巻町三九一
新生社印刷所
東京三二五番

發行所　東京都四谷區舟町十四番地
株式會社軍事界社
出版會々員一〇八五一〇番
振替口座（東京六五六一二番　奉天七三六二番）
電話（四谷(93)二三七六番　二三六四番　五八六六番）

元給配

日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二丁目九番地